

# フィンランドにおける多文化保育の研究

## ー子育てをめぐるパラダイムシフトー

三 井 真 紀

Study of the Finnish multi-cultural child care :  
Paradigm shift in the early childhood care and education

Maki Mitsui

### はじめに

「フィンランドの保育園は遊んでいるだけでしょ？だからヘルシンキでフランス語幼稚園を作りました」（フランス出身・子ども5歳）

「子どもには、フィンランド人としてこの国で生きてもらいたかったのです。だから一切コミュニティに関わりを持ちませんでした」（タイ出身・子ども6歳）

「移住してから泣きどおした息子で、初めて保育園で『これおいしい』といったとき、担任に「シー」と注意されてしまいました」（日本出身・子ども3歳）

「自分も伴侶も結婚前からこの国で暮らしていたから、いきなり来て子育てとは全然ちがったと思う」（日本出身・子ども5歳）

これらは、調査者がヘルシンキでフィールドワークを続ける中で、乳幼児の保護者との対話によって得られた「声」である。淡々と語られるので、われわれがイメージする「移住して暮らす」というストーリーが、まるで些細なことのようにさえ感じられる。けれども、言葉をなぞったとき、フィンランドで暮らすリアルな生活世界が描き出されていることに気が付く。保育空間に反映されるドラマティックな日常が想像できるのである。

### 問題と目的

多様性（Diversity）とは、人々の間に存在する差異のことである。個人間にも差異はあるが、多文化教育論者は通常、集団間の差異に言及する。多文化教育の分野を担うものの多くは、人種的、民族的、ジェンダー、経済的集団、言語、宗教、能力、年齢、性的嗜好性などの属性についても、多様性という観点から記述し、尊重する視点をもつ（Grant & Ladson, 1997）。

世界の国々が多文化共生の成熟型社会へと転換期を迎える中、保育現場においても個々の価値観を重視する異文化間コミュニケーションに重点を置いたカリキュラムが実施されている（Grant & Sleeper, 1985 ; 森, 2001）。フィンランドは、乳幼児期からの多文化共生教育を古くから進め

る数少ない国であり (Kuusisto, 2007 ; Kuusisto, 2009)、多文化保育のためのプログラム「MONIKU」「MUCCA」等がヘルシンキ大学研究者のもとに開発・実践された経緯がある。成果は保育現場に大きな影響を与えることとなった。(三井, 2008 ; 三井, 2014)。

本稿は、多文化保育という現象を、フィンランドにおける子育ての文脈を通して分析することを目的とする。特に、フィンランド在住の移民の子どもの生活世界に注目し、アイデンティティ形成およびコミュニティの様相を探るため、エスノグラフィーの手法を用いて分析を進める。

はじめに、多文化保育とは何か、過去の研究の蓄積や課題と合わせて概観する。続けて、フィンランドの保育制度、労働環境、家族の姿に目を向けながら、乳幼児の生活世界について考察する。最後に、フィンランドの子育てをめぐるパラダイムシフトという観点から、今後への議論を展開していく。

本稿に登場する人物や会話の記録は、2015年9月～2016年9月までの5週間の現地フィールドワークを中心としている。インフォーマントに対する表現には課題も残すが、文中ではカースルズとミラーの移民過程論(1993)を参考に「文化間移動をし、現在フィンランドに定住している(または定住を進めている)家族や個人」を対象に「移民」という表記を用いた。尚、本研究では「多文化保育」を、Grant(1997)らの理論展開をもとに「文化的多様性の尊重と社会的公正の実現の2つの要素を含み、多様な文化集団が相互に尊重しあい、対等に共生する社会を想定し、社会実現に向けた保育を提唱するもの」と定義付ける。

## 多文化保育とはなにか

多文化保育を具体的に説明すると「多文化な状況で実施されている保育」を指す。多文化保育の定義は一定していない。もともとは、アメリカやカナダなどの多民族社会において、マイノリティの平等への異議申し立てとして台頭した概念であった。教育と保育の違いについてはここでは詳しく言及しないが、「教育」ではなく「保育」という言葉を使う背景には、0歳から就学前ならではの意味空間を尊重し、支えようとした保育研究の蓄積がある(青井, 2009)。

民秋(1998)によると、国際化という語が保育現場で使われるようになったのは1974年中央教育審議会が「教育・学術・文化の国際交流について」の答申を出して以降であるという。そこから保育現場における当該分野への関心が一気に強まったのである。多文化保育の具体的な方法論はケース・バイ・ケースであるが、独自の系譜をもっており、異文化間教育、グローバル教育、国際理解教育などと重なりをもちながら発展していくこととなった。

## 多文化保育をとりまく議論

スパークス(1994)の研究によると、ヒトの子どもは生後1年までに肌の色、髪の特徴、明白な身体的能力、性の形態的な違いに注目し、2歳までに、民族、性、障がいについて興味を示すという。3歳までには、社会の基準と偏見に影響されている兆候を子どもは示し、仲間への〈前偏見(pre-prejudice)〉を示していると述べている。つまり、乳幼児期にはすでに、自分を知るプロセスの中でアイデンティティの変容を経験しており、それに関する大人の援助を必要とし

ている。近年、多くの研究で文化獲得の「芽」が生後まもなく活発に始まっていることが指摘され、それに伴い就学期の縮小版ではないプログラムの開発が必要だという議論が活発となった。むろん、このような議論は盛んに繰り返されている。たとえば、異文化間教育学会第16回大会の特定課題研究の提案の中で、山岸（1996）は「多文化共存をめざす社会に生きる人々に求められる能力や資質」を「異文化間リテラシー」ととらえている。そして、異質なものに共感したり、多元的な視点をもったり、他者の立場にたって考えることができる能力を育てるための教育プログラムの開発に期待していた。また、植田（2004）は、お互いの異なりを認め、需要していく心の育成を幼児期から積極的に実施する必要性について論じ、そのことが自尊感情、他者理解に連なり、普遍的な人権意識へと発展していくものであると述べている。

現在、日本の保育現場においても「多様性」という用語が頻繁に使われる。新倉（2001）や品川（2011）らの研究により保育現場の現状把握が進み、多文化保育の原理につながる用語が現場で活用されていることは興味深い。一方で、保育現場が今も混乱を極めている実態にも目を向けなければならない。問題解決に向かわない要因の一つは、「個性を認める」場合の「個性」の捉え方が一律ではなく、受け止める側の意識次第ではマイナスの一面を含む場合もあるからである。乳幼児が「みんな違って、それぞれが良い」と抽象的に理解することは簡単ではなく、親にとっても問題をややこしくしてしまう場合があるのである。もう一つの要因は、保育の問題を「保育現場での実態」のみと認識し、多角的にとらえきれていない点がある。保育の問題は、乳幼児期のコミュニケーション全般の問題であり、生活世界と深い重なりを持つ。しかし注目される点は、園生活での言葉や社会的スキルの発達、「保育者（特に女性）が見る」母親や父親の養育態度が中心となってしまう。また、学習の構えがうまく育たない場合の要因が、文化や宗教の違いや家庭でのコミュニケーション不足であると結論付けられるなど、事実確認が不十分な場合もある。

三浦（2015）は、日本におけるニューカマーの子どもについて研究する中で、「ニューカマーという日本語がわからず、日本の学校への適応に困難を抱えると連想しがち」とした上で、実際は1970年以降に日本に移り住んだニューカマーの子どもたちの日本語は流暢であり、むしろ見えにくい課題にこそ目をむける必要があると示唆した。現在の日本在住の夫婦のうち一方が外国籍である婚姻家庭は、34393組（全婚姻の約4.8%）と上昇傾向にある（法務省、2016）。国際結婚カップルから生まれる児童の多くが、日本生まれ、あるいは生後間もなく来日していて、子どもは生まれるとすぐに多言語・多文化環境に置かれることになる。しかしその場合、家庭での言語的コミュニケーションが質的・量的に十分ではないとはいいきれないのである。新しい時代の「子ども」を正確に捉える必要があるだろう。

## フィンランドの保育と移りゆく街

フィンランドの保育と、それをとりまく近年の街の移り変わりを通し、多文化社会における課題を探る。

### 保育所（Paiväkoti）

フィンランド語で保育所はPaiväkoti（パイヴァコティ）という。直訳すると「昼間の家」である。多くの子どもは保育所で1歳ごろから6歳までの生活を送ることになる。共働き・核家族夫

婦が一般的であるフィンランドにおいて、保育制度の充実は欠かせないものである。すべての子どもは、親の就業の有無にかかわらず保育所に入所する権利を有している。現在の保育制度は、1996年に改正された「保育法」がもとになっており、親から申請があった場合、自治体が3ヵ月以内に保育を提供しなければならないことが決定されている。

フィンランドの保育は、日本のように幼稚園と保育所の二元化はない。つまり、基本的には公立の保育所だけである。尚、フィンランドの保育所が日本で幼稚園と訳される場合もあるが、0歳から通える保育施設であることを考えると、paivakotiの訳は保育所が適切であろう。また、保育所以外に、自治体の監督下に、自宅での保育手当、公園おばさんと呼ばれるプログラムや子育てカフェなどもあり、家族の選択肢が準備されている。保育所の開所時間は原則として10時間で、不規則な勤務時間の仕事をする親のために24時間保育所も市内に数か所用意されている（たとえば、医療スタッフの子どもなど）。私立の保育所やベビーシッターサービスもあるが、いずれも自治体の監督下にあることが原則である。児童と保育者の割合は、0～3歳児のグループは、保育者1人に対して子ども4人まで、3～6歳児のグループは、保育者一人に対して児童7人までと決められている。保育料金は両親の収入と家族構成等によって定められている。

### ネウボラ (Neuvola)

フィンランドの福祉施設として近年日本でも注目されている施設が、ネウボラである。Neuvoとはフィンランド語で「アドバイス」の意味があり、Neuvolaとは「アドバイスの場」と直訳できる。具体的には、フィンランドの保健制度において、妊娠期から就学前まで、子どもの成長に合わせたサービスを受けることができる「よろず相談所」といえよう。特色は、1) 子どもだけでなく、父親・母親・きょうだい等、家族全体を視野に入れた心身のサポートを受けられること、2) スタッフが担当制であり、妊娠期から継続して家族のケアにチームとしてかわっていきことができる。

ヘルシンキ市から地下鉄で15分ほどの東ヘルシンキには、1980年代からヨーロッパ、アフリカ系移民の居住エリアが点在している。この周辺には、シリア難民らの一時収容施設も建設されている。地下鉄終点駅前広場には7階建てのヘルスセンターができており、ネウヴォラが併設されていた。若い家族が活用しやすい雰囲気、立地から、福祉サービスに投資する自治体の姿勢がうかがえる。フィンランドは、北欧欧福祉型社会として、長い間性別、年齢、出身、言語、信仰、健康状態を問わずに「平等である」という原理が強調されてきた。こうした信念を支えにして、フィンランドの保育制度と家族支援の枠組みができあがった象徴的な環境である。



写真1. 開発住宅地域のヘルスセンター。都市部の駅ビルのような佇まい。  
(2016年9月：調査者撮影)

### 働く—kunnon kansalainen から

フィンランド人との会話で、ときおり「Kunnon Kansalainen (クンノン カンサライネン)」というフレーズが出される。直訳すると「ちゃんとした国民」である。子どもへの期待が詰まったフレーズであるといい、実際、20～50代までのフィンランド人カップル、保育者等、あらゆる世代の親から聞かれたフレーズであった。そこには、「正直であること、自分だけでなく他人のことも考えること、仕事をすること、家族がいれば世話をすること等、社会的義務を果たす人間になってほしい」という願いが込められている(三井, 2014)。

フィンランドにおける働き方について、ヘルシンキ在住のN氏(日本出身／子ども2才)は、次のように語る。「ここに7年住んで思うのは、働き方のメリハリがあるということ。だらだらと残業はしない。どちらかといえば、残っている人がいれば何してるんだ、電気を消して早く帰れ、という感じ。仕事？ちゃんとしていますよ、会社員なら、4時に仕事を終わらせるために、8時に会社に来ているだけです。よく1日4、5時間しか働かないイメージがあるといわれるけど、そんなことはない！むしろ、昼ご飯は20分で食べる人もいます。もう何がなんでも4時に帰るぞ、みたいな。きっちり定刻で帰るための工夫やプレッシャーはあるかもしれませんね(笑)」。

A氏(中国出身／子ども2歳)は、海外での勤務経験豊かで「アメリカや中国はとにかく仕事熱心な人が多い。それは精神的に疲れるほどだった」と、振り返る。その点、フィンランドはもっと穏やかな気持ちで仕事ができるという。もちろん怠けているわけではないし、まじめだと思うが、いざ子どもが病気になったら休める権利と環境が準備され、みんなでコーヒーを飲む時間もあると述べた。

これらの事例だけで論じることは避けたいが、ここからフィンランドにおける働き方の一端を見ることができる。同時に、働く親にとって精神衛生上、安定した職場であることに想像を巡らす。フィンランドでは「子育て」をしながら、親子が過ごす時間を保障しようとする意識が高い。親自身がよく育ち、結果として社会の安定につながる見通しを持っているからである。近年、フィンランドをはじめ、ニュージーランド、スウェーデン、イギリスでは、仕事と子育ての両立を支援する保育所を、社会福祉から教育の所管に移し、積極的な公的投資を行う方向に動いた。日本では「最小のコストで最大の受け入れ」という概念がいまだ重視されている。「子育て」を単体で捉える傾向が強かった歴史的背景が関与していると考えられる。

### 家族—ヘルシンキの子ども

ヘルシンキ市立保育園の保育士S氏は、小学生の子ども2人を育てながら、東ヘルシンキの保育所で働いている。保育現場における家庭生活の影響について、話してくれた。フィンランドで



写真2. サポート家族の記事  
(ヘルシンキ・サノマツ紙より)

は、もともとアルコール、低所得、離婚や再婚に関する問題があったこと、現在それに加えて難民家族の問題もあったとした上で「巻き込まれるのは子どもだなと感じます」と話す。そして「文化の多様性という聞こえはよいけれど、個人の特性というか・・・課題のある家庭は、複数の課題を抱えていますし、それは文化や宗教の問題とはいえないでしょう」と続けた。さらに、難民としてフィンランドにやってきた子どもは、ほかの子どもよりも何倍もの苦しい経験をしてくれていること、そのような家族について「多様性」

と括ることの危険性を述べた。

現在フィンランドでは難民としてやってきた子ども（特に、単独でやってきたり、家族と死別したりした0歳～18歳までの児童）を対象とした「サポート家族」というシステムも始まっている。ヘルシンキ市の新聞ヘルシンキ・サノマツ紙面に掲載された記事では、ごく一般的なフィンランド人家族と過ごす体験にどのような効果があるか、受け入れ家族のインタビューを通して紹介されている。

## 移民家族の生活世界

### 「場になじむ」とは

店を営むR氏（中国出身／子ども5歳）の暮らしぶりは、自身によれば最初から「遠慮しない」ものであったという。フィンランドでは、日曜に開店するレストランは都市部でも数少ない。個人商店も市場も多くは閉店している。スーパーマーケットや喫茶店、バーなどは、数時間だけ開ける場合がある。ところが、誰に聞いても「中国の人の店は大丈夫だよ」「あそこは開いているよ」「とても便利で助かっている」と教えてくれる。周囲の人々にいわせると「よく働く」のだという。ルーテル教会の本拠地であるフィンランドであれば、「相手の文化になじむ」ということは日曜日に仕事を休むということではないのだろうかという疑問もわく中、日曜の午後、店に出むいた。昼下りの店内には、小さな子ども連れを中心とした中国出身家族が3家族ほど集まっていた。買い物客らは店主と会話をしている。アジア人が多いが、フィンランド語を話すカップルもいる。店主に話を聞くと、実際に一番多く来店するのはフィンランド人だという。この国のために役立っている意識が高いことも口調から伝わった。

フィンランドの保育現場では、日本ほど「なじむ」こと、または類似して「人に優しくして仲間になること」への期待が強くない。たとえば、参与観察の場面においても「一人だけ違う」「一人だけできない」ことに関して、保育者からの関心が極めて薄いことがわかる。友達のおもちゃの取り合いで、「仲良く遊んで」という終結を望む保育者も少ない。園生活が始まったばかりの子どもに、皆と仲良くすることを早くから求める様子も見られなかった。日本では、子どもが園になじむ（しかも早く、スムーズになじむ）ことが、親も保育者も最大の関心事である。フィンランドの保育所で生き生きと過ごす中国出身の幼児を見ながら「場になじむこと」の意味を再考した。

### 文化をともしなうバイリンガル

ヘルシンキ在住の日本人D氏（日本出身）は、フィンランド人と結婚し移住して6年目になる。保育所に通う娘2人はフィンランド生まれフィンランド育ちであるが、流暢な日本語を話し、すでにコードスイッチングも完璧にみえる。そんなD氏が語ったのは「フィンランドには鳴く虫がない」という悩みだった。日本では、夏には昼間セミが鳴き、秋には夕暮れ時からコオロギやマツムシが鳴き始める。確かにヘルシンキ周辺では、セミもコオロギも鳴いているところを聞いたことがないことに気が付いた。ここからは、文化を伴うバイリンガルへの育ちについて考えることができる。

子どもの意味世界を知るためには、このような日常生活で遭遇する事柄を見逃さず、乳幼児が、

いつ、どのようなスクリプトを形成するのかを理解していくことも同時に重要である。

### 「共感はないが、共存は認める」

乳幼児期に文化間移動をする場合、自分の意志とは関係なく新しい生活が始まる。現在、海外旅行や多文化交流が頻繁になる中で、乳幼児の偏見のないふるまいや適応力に驚くことも多い。では、乳幼児期は大人の援助なしに新しい社会で自分らしく育つのであろうか。

フィンランドに来て6日目のM氏と息子Uちゃん5歳の事例である。Uちゃんは、社交的で賢く、フィンランドの好きなところを次々と話し始めた。途中「でもね、キートス（フィンランド語でありがとう）って言ってくれない人もいるんだよね……。その時にはすごく悲しくなるし、なんかUが悪いことしたかなーって思っちゃう」と言い始めた。M氏は、日本のレストランや買い物のシーンに慣れ親しんでいるUにとって、フィンランドのレジ係やウエイターの行動パターンは非常にそっけなく、自分が無視されているように感じとっているのではないかと分析した。実は、M氏も同じ気持ちだという。M氏自身は海外での生活経験は豊富なほうであるが、フィンランド社会の買い物シーンを真似てみても、情動は自分の育った日本のままであると述べた。

祖父江（1997）は、人には「異なった文化の持つ慣習」に対する反発の感情があり、「共感はないが共存は認める段階」があり、そのさきに「共感を抱く段階」が続くことを説明した。異文化に対する態度にはさまざまな段階があるのが当然であるが、「共感を伴う場合」が、真の安定した状態である証だと述べている。箕浦（1990）は、ある文化の意味体系の中で生活し、いろいろな体験を重ね繰り返すうちに、個人はその社会システムが内包している意味あるものを取り込み、あるものを拒否し、自らの意味の世界を築くという。自分の意味空間が社会のそれと大きくズレるとき、個人は何らかの居心地の悪さや不適合間を抱くのである。これは、異文化の中で感じる認知・行動・情動のズレであるという。では、乳幼児が自身の意味空間を形成していくとき、多文化保育はどのような役割を担うのだろうか。そして、家族との日常やコミュニティは、どのような働きをしているのであろうか。

ヘルシンキ在住K氏（タイ出身／子ども5歳）によると、タイでは、共働きが多いので、夕食はもっぱら屋台のできたての料理を調達して帰宅すると話してくれた。そして「いわゆる日本のお惣菜です（彼女は日本についても知識が豊富）。屋台があることで非常に効率もいいし、美味しくて綺麗で食材豊かな食事を食べることができるのです。みんなハッピーですよ？日本の女性は手料理が上手でしょう。タイの女性も同じようにヤムウンセン作れると思っているかもしれないけれど、それは違う（笑）食べることは好きだけれど、家族のために無理をしない主義が、フィンランドに来てとても似ているなと思いました。もちろん夕方の屋台があれば完璧だと思います」と続けた。K氏と話す中で気が付くのが、周りの沢山の友達の存在と家族の愛情である。自分のやり方について疑問を持つとき、愛されているという人間関係があることは重要である。それは、文化間移動をしている乳幼児も同様で、周りと違う行動や理解があることで不安になったときに家族や友達に大切にされているという経験が助けとなる。その影響は、その後の学習だけでなく、理解する、選択する、決定する、想像するなどといった能力の育ちにも大いにかかわる。

## まとめ

現在、多くの研究で、子どもの育ちが教育現場だけでないことが明らかになっている。保育においても、保育所での子どもの学びを考えると、保育所以外でいかに豊かな学びの場が獲得されているかを視野に入れることが重要である。関（2002）は、エスニックコミュニティにおけるニューカマーの子ども達について「学校では、マジョリティの論理に巻き込まれてしまうマイノリティであっても、その他の場で主体的に学ぶことによって自尊感情を維持することが可能」と分析する。つまり、保育の場で大事にされ尊重されることは勿論であるが、保育以外の場でどのように育ちがなされているか見守ることが重要なのである。

移民の子どもの世界は、親の持つネットワークやコミュニティが大きく影響している。しかし、過去の研究では、親たちの生み出す教育資源には目を向けられる機会が少なかった。ネットワーク形成の方向性、エスニックコミュニティの原理、個々の活用の仕方について理解することを大切にしたい。フィンランドの乳幼児の生活世界を把握するために、保育所と家庭のあいだで生きる子どもの育ちを確かめ、教育資源豊かなコミュニティ、家族、子どもの力を信じつつ研究を進めていく。

## おわりに

2009年冬、初めてヘルシンキ日本語補習校を訪問したときの圧倒的なエネルギーを記憶している。凍った扉を開けると、フィンランドにありながら、そこには確かに「日本」が広がっていた。しかし、それが日本語だけに由来するものではないと気が付く。子どもの中にある日本、つまり補習校を拠点に形成されるネットワークやコミュニティ、個々の持つ日本との接点が、そこをフィンランドの「日本」にしているのである。三浦（2015）は、日本に住むフィリピン系ニューカマーの調査において「日本の中に点在する小さなフィリピン」という表現を用い「子どもたちは多かれ少なかれ、小さなフィリピンとの接点をどこかで持っている」と分析した。フィンランドにも日本との接点があるとしたら、乳幼児期から注意深く見守ることで、出身国や母文化・母語に誇りをもつことや、自尊感情にもつながっていくであろう。もちろん、あらゆる現場の保育者や教師が、一時的な補償教育の域を超えて、子どもと家族の成長を共有する姿勢につながることを期待したい。

今、多文化環境にある子どもの捉え方は、転換期ともいえる。佐藤（2009）は、「なによりも重要なことは、子どもの過去と未来をつなぎ、そのアイデンティティを支えることであろう」とし、軸をつなぐキーパーソンとして「意味ある他者との出会い」を挙げている。フィンランドにおいても、乳幼児期の問題は、親や家庭、雇用の問題と密接にかかわっている。したがって、子育てを捉えるときに、保育所や学校中心の構想から、生活全体を視野にいたれた発想へとパラダイムシフトすべき時期が来ているといえよう。今後、フィンランドにおける子育てという現象の中で、「意味ある他者」の存在について議論することも課題の一つである。また、家族の育ちという視点からも、多文化保育という切り口を広げ、フィンランドにおける乳幼児期の生活世界を注意深く観察することを続けたい。新しい角度から、多文化保育のリアリティを探りたい。



## 謝 辞

本研究は、2016年度科学研究費補助金（課題番号24730715）「フィンランドにおける多文化保育の研究」成果の一部です。ご支援くださいました関係者の皆様に感謝申し上げます。とくに、研究協力者として支えてくださったフィンランド在住のみなさまに心よりお礼申し上げます。

## 引 用

- Anni Hausen. (2016). Suomen kieltä Legojen avulla. Helsingin Sanomat, A16.
- 青井倫子. (2009). 保育という方法. 小田豊・青井倫子編著. 幼児教育の方法. 北大路書房. 3-4
- Grant & Gloria Ladson-Billings. (1997). Dictionary of Multicultural education. Oryx Press.
- Grant, C.A. & Sleeper, C.E. (1985). The literature on multicultural education: Review and Analysis. *Educational Review*, 37, 97-118.
- 法務省. (2016). 平成27年末現在における在留外国人数について（確定値）<http://www.moj.go.jp>
- Kuusisto, A. (2009). Growing up within a Religious Community: A Case Study of Finnish Adventist Youth. *Journal of Empirical Theology*, 22, 47-69.
- Kuusisto, A. (2007). Religious identity based social networks as facilitators of teenagers' social capital: A case study on Adventist families in Finland. In H. Helve & J. Bynner (Eds.) *Youth & Social Capital*. London: Tufnell Press.
- 新倉涼子. (2001). 外国人児童の保育への負担度および保育士の異文化理解の姿勢に影響を及ぼす要因の検討. 保育学研究, 39(2), 40-48.
- 三井真紀. (2014). フィンランドの子育て支援. 多文化保育・教育論. みらい出版.
- 三井真紀. (2008). フィンランドの保育環境に関する一考察(2)ー多文化保育プログラムMONIKUから. 九州ルーテル学院大学VISIO, 37, 81-88.
- 箕浦康子. (1990). 文化の中の子ども. 東京大学出版. 14-71
- 三浦綾希子. (2015). ニューカマーの子どもと移民コミュニティ 第二世代のエスニックアイデンティティ. 勁草書房.
- 品川ひろみ. (2011). 多文化保育における通訳の意義と課題: 日系ブラジル人児童を中心として. 保育学研究, 49(2), 224-235.
- 祖父江孝男 (1997). 異文化間リテラシーと異文化間能力. 異文化間教育, 11
- 民秋言. (1998). 外国人の子どもの保育ー親たちの要望と保育者の対応の実態ー. 萌文書林. 165-167
- 植田都. (2004). 外国人幼児・児童生徒への言語教育(1): 多文化共生社会における教育のあり方を探る. 関西外国語大学人権教育思想研究, 7, 2-33.
- 山岸みどり (1997). 異文化間リテラシーと異文化間能力 異文化間教育, 11